

Windom 2014 年度藤田保健衛生大学医学部後期《英語解答》

第1問

問1. あ：(1) い：(4) う：(2) え：(3)

問2. (3) 問3. (3) 問4. (4) 問5. 2番目：(3) 4番目：(4)

問6. (2)

問7. 「低い出生率は裕福な人々が有利な立場を守るために使う戦略である」

問8. (2)(5)

全訳

人口過剰はおそらく人類が直面している最大の難問である。人間の数が10億に達するまで1800年までかかった。今や人口は70億を超え、2085年までには100億に達するはずである。疑問の余地があるとはいえ、それはまた我々の種としての成功の証拠でもある。人々がますます良い食事を取り健康で安全である世界では、人口爆発が予期されるのみである。実際、人間の数について驚くべきことは、もっと速く増加していないことである。そのような好条件の下で予期できるほど急速に増加するどころではなく、人間の出生率は世界中で急落している。何故であろうか。

一つの明らかな答えは、避妊法が私たちの生殖の運命を制御して私たちが持つ子供の数を制限できるようにしていることである。しかし私たちがなぜこのことを選んで行うのかは進化生物学者にとって謎である。結局、あなたが生きてこれを読んでいるのは、生殖にたけた長い祖先のつながりに由来しているからである。時代が厳しく資源が少なかった時、その祖先は次の世代に遺伝子を伝えることに成功した者たちであった。今日、生き残ることは私たちの多くにとってはずっと容易であるはずなのに、なぜ私たちは生物学的な有利さを利用して多くの子供を産まないのであろうか。

伝統的な発展途上の社会では、出生率は富の増加とともに上がるが、このパターンは豊かな産業国では反対になる。これは人口学的推移として知られている現象である。例えば、ヨーロッパ連合では、現在の一人当たりの女性における平均的な子供の数は1.6人で、人口を維持するのに必要な2.1人をはるかに下回っている。人口学的推移は進化原理には完全に反するように思えるので何十年の間生物学者たちを悩ませてきた。一見して、私たちが富を蓄えるにつれてより少ない子供を持つ傾向は不適応に見える。進化的に間違った方向である。しかしそうではないのかもしれない。低い出産率は実際には長期的に有利でありえる、もしより少ない子供に大

いに投資することによって親が最終的に子孫の数を増やし、自らの血統を確かなものとするのなら。

この考えには何か根拠があるかもしれないという最初の強い証拠が2008年に現れた。この年デイビッド・ローソンとルース・メイスがイギリスの14,000人の子供を対象とする研究結果を発表した。彼らは、大家族の子供たちが親の時間とお金が投資される量が減らされることで苦しみ、このことが子供たちの教育的、身体的発達に否定的な結果をもたらすことを見出した。その一方で、兄弟の少ない子供たちは学校での評価がより良く、大家族の子供たちよりも背が高い傾向にさえあった。

それでより少ない数の子供を持つことを選ぶ親は、子供により投資するのかもしれない。しかし進化の点から重要な問いが残る。小さい家族の利点と富は世代を通じて伝わり最終的により多くの子孫を生み出すのであろうか。これに答えるには数世代にわたる教育、富、出産のデータが必要であろう。意外なことにこの情報は19世紀にウプサラで生まれた14,000人のスウェーデン人女性とその今日までの子孫の集団に関して手に入る。ローソンとその同僚は最近その一連のデータを分析した。ではそれは何を教えてくれるのか。

先行する研究を反映して子供の数が少ない元の集団の女性たちの子孫は大学に行きより稼ぐ傾向にあった。しかしながら、この高い投資の血統は長期的にはより成功することはなかった。その代り、元々子供の数が多かった女性たちが今日、より多くの子孫を残している。「それは非常に密接な関係で、子供の数が少ないことに適応性の利点がないことを示しています」とローソンは言う。

先の理論は間違いのようだ。しかしそれでも人口学的移行を支える進化的根拠があるかもしれない。進化人類学者のサラ・フルディは、人間の歴史の大半を通じて卵子を形成できる女性は相手を見つけ、妊娠し、子供を産むという単純な理由から、自然選択が多くの子供を産みたいと思う女性に有利には働かなかっただろうと指摘する。しかしながら、進化は、地位を求める競争に最も成功し、より多くの資源、個人的安全、より高い質の相手を得られる女性たちに有利に働いたであろう。そしてそれが現代世界の豊かな地域において、私たちがどう行動するかに影響を与えるものである。「もしあなたが高い地位と収入に価値が置かれ、あなたの地位があなたの得る仕事や教育の種類によって決定される社会に暮らしているのなら、それらのことを子供を持つことよりも優先するでしょう」とフルディ

は言う。

ローソンは、地位を求めるという進化した傾向が、増大する富と減少する出生率の間のつながりを説明すると信じている。「私たちは、地位と富を得ようとするのが普遍的で、明らかであり、意識的な戦略であることを知っています。誰もが成功し、好かれ、財産を持ちたいと思っているのです」彼が言うには、人間存在の歴史の大半を通じて、生殖への欲求は私たちの子作りの結果を最大限にするのに十分であったが、現代の技能に基づく賃金労働経済において、地位を求めることが子供を産むことと対立関係にある。あなたは裕福な人がより多くの子どもを持つ余裕があると思うかもしれないが、もし彼らが、自分の子供に私立学校や良い医療といった飾りを与えなければならぬと感じるのなら、子供は負担となる。低い出生率は裕福な人間たちが自分たちの有利な立場を維持するのに用いる手段である、とローソンは言う。その結果、地位を求めることによって私たちは私たちの遺伝子を伝える可能性を下げってしまう不適応の生殖を選び易くなるのである。

第2問

問1. 【甲】患者の命を救うこと

【乙】提供者の危険を回避すること

問2. (2) 問3. (4) 問4. (4) 問5. 2番目:(2) 4番目:(3)

問6. (2) 問7. (3)(4)

全訳

移植の大抵の臓器は死体に由来するが、これは増加する臓器の必要性に
応じていないので、生きている人の臓器に注意が向けられてきている。生
きているドナーによる臓器提供は、医師が患者の命を救うかその生活を向
上させるかするために健康な人の命を危険にさらさなければならないと
いう独特な倫理的板挟み状態を提起している。それ故、移植外科医は生き
ている人の臓器を選ぶことに慎重である。しかしながら、外科技術とその
結果が向上しているので、生きている人の臓器を用いるやり方が徐々に広
まってきている。

生きている人の臓器提供は、三つの部門に区別される。愛する人や友人
に向けられた臓器提供、ドナーが臓器を一般的な共同管理施設に与え待機
リストの先頭の受取人に移植される不特定の人に向けられた臓器提供、ド

ナーが前もっての感情的つながりのないある特定の人を選ぶ見知らぬ人に向けられた臓器提供である。

それぞれの型の臓器提供ははっきりとした倫理的懸念を引き起こす。愛する人や友人に向けられた臓器提供では、提供する人にかかる重圧に関する心配が生じる。提供したくない人に強制感を与えることがあるのである。こういった場合、移植計画は一般的にもっともらしい医学的弁解を進んで認め、その人が見苦しくないよう辞退できるようにする。しかしながら、同様に重要なのは人が自分自身に対する結果にかかわらず提供するよう強いられていると感じる状況である。ある場合には、呼吸不全で死にかけている子供の両親が、その子の命を救おうと必死だが不可能な試みで自分の肺葉を提供しようと言い張る。そのような強制感はまれなことではない。このような場合、親戚のインフォームドコンセントを単に得るだけで十分である。医師は成功の可能性が(犠牲と)釣り合って高くない限りは人に潜在的に命を危険にさらす犠牲をやめさせるよう義務付けられているのだ。

不特定の人に向けられた臓器移植は異なる倫理的懸念を提起する。見知らぬ人に潜在的に命を危険にさらす犠牲を払うよう促す過激な利他主義には、注意深い調査が必要である。最近の一つのケースは、お金から臓器に至るあらゆる物を与えたいという思いに病的に取りつかれた男性で、この人はそうすることが「食べ物や水、空気と同じくらい必要なことである」と言っていた。腎臓を一つ見知らぬ人に与えた後で、彼は劇的な自殺を遂げてどのように自分の他のすべての臓器を与えることができるかと考えた。ほかの心理学的に疑わしい動機も排除される必要がある。臓器提供者は鬱や低い自尊心を埋め合わせようとしているのか、メディアの注意を引こうとしているのか、臓器受取人の人生にかかわりたいという希望を抱いているのであろうか。移植チームはこれらすべての点で臓器提供者となりえる人を評価し、深刻な懸念を引き起こす臓器提供を禁止する義務を負う。

見知らぬ人に向けられた臓器提供は、付加的な問題とともに同様な倫理的問題を提起する。この型の臓器提供は、患者がテレビや屋外広告版、インターネットを通じて公に臓器を求める宣伝を行う時に生じる。そのような宣伝は違法ではないが、移植界では強く反対されている。二つの中心的な反対意見は、そのやり方は不正であり、臓器が「人生の贈り物」であって売り買いする商品ではないという見方を脅かす、というものである。

倫理的に最も問題のあるケースは、受取人が人種、宗教、民族集団を基

に選ばれる時である。例えば、あるケースではフロリダのある脳死男性の家族が男性の臓器を提供することに同意したが、その男性の人種差別的信念の理由から受取人は白人でなければならないと主張した。臓器はそれに応じて与えられたが、フロリダ州はその後で患者や家族がそのような制限をつけることを禁じる法を通した。

しかしながら、受取人を選ぶ動機が非倫理的である場合ですら、臓器提供が進められるようにする理由がある。ハーバード大学医学部の医学倫理部門によって主催された最近の公開討論で議論されたケースを考えてみよう。ニューヨークのあるユダヤ人が腎臓移植を必要とするロサンジェルスの子供について知った。その男は自分と同じ信仰の誰かを救いたかったので、この特定の子供を助けるために腎臓を提供することに決めた。彼の差別的好みにもかかわらず、その提供は許されると思われるかもしれない、なぜなら少なくともある患者が利益をえるだろうし(その子供は腎臓を受けて、待ちリストでその子の下にいる人たちは順番が一つ上がるだろう)、誰も害を受けることもないだろう(待ちリストのその子の上にいる人たちはその男が彼らに与えることはないので、どうあっても腎臓を得ることはないだろうから)。見知らぬ人へ向けられた臓器移植が公正の基準を破っているのかどうかは議論の余地がある。しかしもしそれが許されるのなら、差別的な好みを禁じることは非常に難しいだろう。なぜなら提供者は理由を述べずに単に臓器がある特定の人に行くように述べるだけなのだから。

第3問

ア : magazines	イ : its	ウ : different	エ : list
オ : become	カ : short	キ : remains	ク : people
ケ : male	コ : whom	サ : number	シ : time

全訳

2008年から2009年にかけて日本語で広く使われる「草食系男子」という言葉が流行となった。それはテレビ、インターネット、新聞、雑誌を含むあらゆるメディアでもてはやされ、時には日常会話においてさえ耳にされた。その言葉がより広く用いられるにつれ、元の意味は多様化していき、人々は様々な異なる意味合いでその言葉を用い始めた。2009年の12月、その言葉はU-CAN支援の「流行語大賞」のトップ10リストに載った。

2010年までには、その言葉は普通の名詞となり、2011年の今現在、人々はその言葉に特別の関心はないようだ。流行語の寿命は短いので、その言葉もまもなく廃用になるだろう。しかしながら、この言葉の出現が人々の若い男性に対する見方を根本的に変えたという事実は残る。それはおそらく日本の男性の歴史における画期的出来事として描写されえるかもしれない。

「草食系男子」という言葉が広まったのは、その言葉が当てはまる実際の「男」が日本社会に存在するからである。人々は既に「男らしさ」を失ったか、「女性化」した若い男性が増えている事実気付いていた。この傾向の兆候は、髪の色を薄茶色に染めたり、はやりの指輪をはめたり、耳にピアスをしたりする流行に敏感な若い男性が20世紀の終わりに出現し始めた時あたりから存在していた。